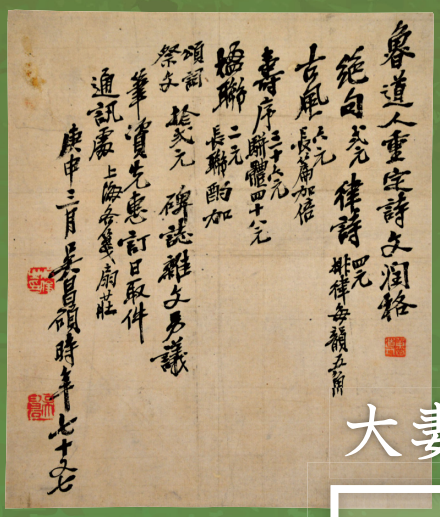
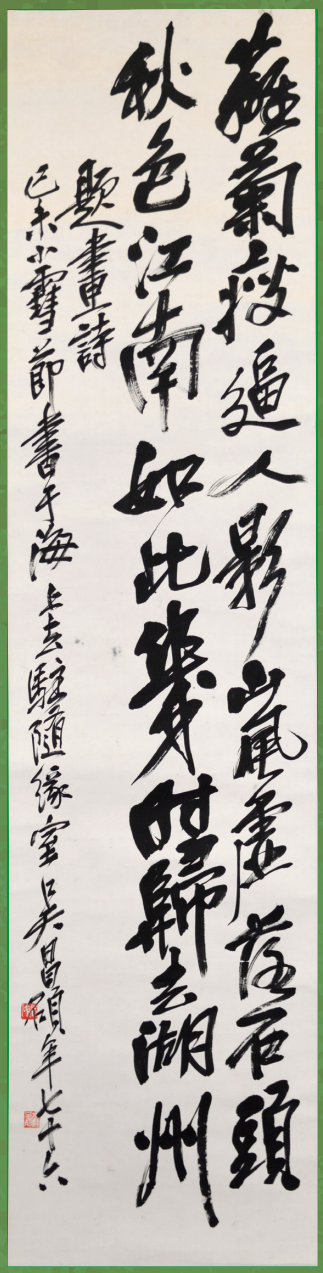
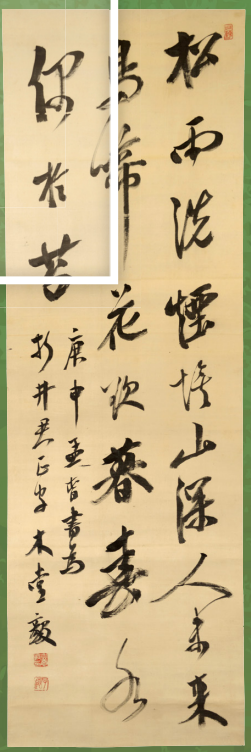




大妻女子大学博物館 特別展

吳昌碩と日本人士

―中国最後の文人と交流した書画文墨趣味ネットワークの人々―



主催　大妻女子大学博物館

ご挨拶

詩・書・画・印（篆刻）にすぐれ、「中国最後の文人」と称される呉昌碩は、多くの日本人士と交流している。辛亥革命により、評価が一変した呉昌碩を尊び、その作を求めたのが漢学の素養を有する日下部鳴鶴、犬養木堂、富岡鉄斎、長尾雨山といった日本人士たちであった。彼らは、呉昌碩との交流により「書画文墨趣味ネットワーク」を形成し、当時の欧化風潮のアンチテーゼにもなった。

今回、京都の宮崎家より、大妻女子大学博物館に呉昌碩「行書題画詩軸」が寄贈されたのを機に、呉昌碩および呉昌碩と交流した日本人士の書画を展示する特別展を開催することになった。展示の筆頭となる呉昌碩「行書題画詩軸」は、大正八年（一九一九）、京都の家具宮崎三代目・宮崎平七氏が、上海に呉昌碩を訪ねて揮毫を依頼した作の一つで、当時七六歳の呉昌碩が自作の詩を風格ある行書で揮毫した絶品である。また、呉昌碩が、友人の魯道人（徐子昇）のために定め、揮毫した稀少な詩文作成料一覧表「魯道人重定詩文潤格」も展示される。

日本人士の書画では、日下部鳴鶴「竹石図軸（田代秋鶴箱書）」、犬養木堂「行草書廖道南題画詩軸」、富岡鉄斎「与山田聖華房尺牘」、長尾雨山「老梅図軸」など計二八件を前後期に分けて展示する。これらは、華やかさはないかもしれないが、文人気質に溢れた逸品ばかりで、呉昌碩と一脈相通ずるところを見出すのも鑑賞の楽しみとなろう。

呉昌碩と交流した日本人士による「書画文墨趣味ネットワーク」には、漢学者や書画家のみならず、政治家、財界人さらには医学者なども加わっており、当時の社会に大きな影響を与えた。作品鑑賞と共に、これらの人々の行跡にも思いを馳せていただければ、この展覧会の意義がより大きくなると思う。

大妻女子大学　文学部
教授　松村　茂樹

呉昌碩について

呉昌碩（一八四四―一九二七）、名は俊卿、字は昌碩、缶廬また苦鉄などと号した。浙江安吉の人。杭州の詁経精舎に入り、創設者の阮元（一七六四―一八四九）が摹刻した天一閣蔵北宋石鼓文本を学び、阮元の学統に連なる古文学派経学の学者として詩文書画を作った。辛亥革命が起こった一九一一年、六八歳の時、書画の一大消費地であった上海に進出、海上派の領袖として重きをなした。また、多くの日本人士に敬愛され、交流を求める者は引きも切らなかった。

凡例

一　本図録は二〇二一年三月一六日から五月一二日まで、大妻女子大学博物館において開催する特別展「呉昌碩と日本人士　―中国最後の文人と交流した書画文墨趣味ネットワークの人々―」の展示図録である。

一　この特別展は、松村茂樹（大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科　教授）が企画し、大妻女子大学博物館が展示作業を担当した。

一　各資料の解説は、松村茂樹（資料番号1～6、8、10、12～22、24、27、30）、木村淳（大妻女子大学非常勤講師、資料番号7、9、11、23、25、26、28）、青木俊郎（大妻女子大学博物館学芸員、資料番号29）が執筆した。

一　本図録の編集および掲載図版の撮影は、青木俊郎・藤井暖子（大妻女子大学博物館学芸員）、田中亜美（同）が行った。

一　参考文献として、松村茂樹『呉昌碩研究』（研文出版、二〇〇九年）、同『呉昌碩と日本人士』（大妻女子大学人間生活文化研究所、二〇一九年）、同『書と画を論じる』（研文出版、二〇一九年）等を参照した。

一　資料解説には、名称・作者・法量（㎝）・年代・所蔵を表記した。なお、本図録の資料掲載の順序と展示の順序は、必ずしも一致しない。

一　本図録は、大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト（課題番号K二〇〇七、採択課題「呉昌碩と日本人士研究」）の助成により発行するものである。

解説

1　行書題画詩軸

呉昌碩　縦一三二・九×横三三・六
大正八年（一九一九）　大妻女子大学博物館

京都の家具宮崎三代目・宮崎平七（一八七四―一九四六）の為に、自作の題画詩を行書で揮毫。「籬鞠瘦逼人影、山風虚落石頭。秋色江南如此、幾時帰去湖州。題画詩。己未小雪節、于海上去駐随縁室。呉昌碩年七十六。」〔籬の菊は痩せて人影に逼り、山の風は虚しく石頭に吹く。秋色の江南はかくのごとし、いつ湖州に帰れるのか。題画詩。己未（一九一九）小雪節、上海の去駐随縁室にて。呉昌碩七六歳。〕

2　行草書廖道南題画詩軸

犬養木堂　縦一二六・六×横四一・八
大正九年（一九二〇）　大妻学院

犬養木堂（一八五五―一九三二）、名は毅。岡山の人。政治家。洋画家・折井愚哉（一八七一―一九三二）の為に、明の廖道南「題画」詩を行書で揮毫。「松雨洗煙埃、山深人未来。鳥啼花欲暮、春水偶於苔。庚申孟春、書為折井君、正写。木堂毅。」〔松に降る雨が煙塵を洗い、山は深く人は来ない。鳥が啼き花は尽きようとし、春の川に苔が伴う。庚申（一九二〇）孟春、折井君の為に書く、字を正せ。木堂毅。〕

3　草書自作詩軸

山本二峯　縦一五八・九×横三五
昭和時代　大妻学院

山本二峯（一八七〇―一九三七）、名は悌二郎。新潟佐渡の人。実業家、政治家。自作の「戊辰八月函根初月楼即事」詩を草書で揮毫。「漠々一望山与雲、雲開山出象形分。夜来定有翻盂處、遠近溪聲劈耳聞。戊辰八月函根初月楼即事。二峯。」〔果てしない一望の山と雲、雲が開き山の形が明らかになる。昨夜はきっと飲んだのであろう、遠近の溪流の音が耳をつんざく。戊辰（一九二八）八月函根（箱根）初月楼即事。二峯。〕

4　草書自作詩軸

山本二峯　縦一三四・五×横三二・四
大正・昭和時代　大妻学院

自作の「長野城山館展望」詩を草書で揮毫。「犀川流合筑摩川、憶起両雄事武年。竟逸長蛇何處是、奔流瀟瀟入蒼烟。長野城山館展望。二峯悌。」〔犀川が筑摩川（千曲川）に合流し、川中島の合戦が思い起こされる。長蛇の川はどこまで続くのか、奔流は流れて蒼い靄に入る。長野城山館展望。二峯悌。〕3・4の両作共に、呉昌碩刻「二丰」朱文印、「山本悌印」白文印が落款印として捺されている。

5　竹石図軸（田代秋鶴箱書）

日下部鳴鶴　縦一二二×横四一・五
明治・大正時代　大妻学院

日下部鳴鶴（一八三八―一九二二）、名は東作。近江彦根の人。書家。製本業の大成堂主人・山田音七（一八八二―一九四一）の為に竹石図を画き、自作の詩を題す。「移得瀟湘碧、数竿牕下栽。清風将細雨、夜々為君来。大成山田君博粲、鳴雀東作。」〔瀟湘の碧玉のような竹を移し得て、数竿を窓下に栽えた。清風が細雨をもたらし、夜毎に君が来るようにしてくれる。大成山田君のお笑い種に、鳴雀（鶴）東作。〕

6　隷書軸

岸田吟香　縦三一・五×横九三・五
明治二九年（一八九六）　大妻学院

岸田吟香（一八三三―一九〇五）、名は大郎、吟香と号した。美作久米北条の人。実業家。洋画家の岸田劉生は第九子四男。上海滞在中の日下部鳴鶴が楽善堂を介して呉昌碩に「鳴鶴」印を依頼し、早朝に会心の作ができた呉昌碩は、寝衣のまま楽善堂に馳せ付けたというエピソードがある。四字句を隷書で題す。「済世情殷。丙申四月、岸田吟香題。」〔済世の心は盛んである。丙申（一八九六）四月、岸田吟香題。〕

7　楷書軸

岸田吟香　縦一二五・二×横三二・二
明治一六年（一八八三）　大妻学院

この作は岸田吟香が明の李日華の七言絶句「題画与沈子広」を楷書で揮毫したもの。「雨寒松閣恣高眠、夢入金庭陟紫煙。七十二峯多忘却、聴泉剛記到開先。癸未仲夏。岸吟香。」〔冷たい雨が降り松林にある楼閣で枕を高くして眠っていると、夢に金庭山に入り靄の中を登った。数多の峰はほとんど忘れてしまい、開先寺に着いて泉の音を聴いたことは覚えている。癸未（一八八三）仲夏。岸吟香。〕

8　茂林消暑図軸

橋本獨山　縦二二・一×横二六・七
明治四四年（一九一一）　松村茂樹氏

橋本獨山（一八六九―一九三八）、原姓は林、幼名は松次郎、新潟魚沼の人。僧侶。早年、富岡鉄斎に師事。元老の西園寺公望に呉昌碩の良さを説き、西園寺は、大正八年（一九一九）、訪仏の途次、上海で呉昌碩に会う。四二歳時、山水図に款書を草書で題す。「辛亥之五月、墨戯撫彫鷲虚中、新緑欲滴處。獨山。」〔辛亥（一九一一）五月、戯れに空中の鷲から見た、新緑の美しいところを写した。獨山。〕

9　行書自作詩軸（「黒龍江七絶」詩）

大倉喜七郎　縦二八・四×横二二・七
昭和七年（一九三二）　大妻学院

大倉喜七郎（一八八二―一九六三）、号は聴松。東京赤坂の人。大倉財閥第二代総帥としてホテルオークラの経営等、各種実業に従事するかたわら、東洋の美術品および古籍を収集。この作は自作の詩「黒龍江」を行書で揮毫したもの。詩の大意は「北方の馬が高く万里の天にいななき、黒龍江のほとりは人家の煙がまばらである。凍風の冷たさは骨を切り裂くこと剣よりも鋭く、夕暮れの景色は鉄鞭で打たれるような寒さの訪れを告げている。」

10　水墨玉蘭図軸

田口米舫　縦一三八・四×横三三・六
大正四年（一九一五）　松村茂樹氏

田口米舫（一八六二―一九三〇）、名は茂一郎、栃木佐野の人。書家。呉昌碩を高く評価し、大正元年末、篆書「侯先生之室」を嘱している。これは後に、谷中全生庵にある米舫の墓石に刻された。また、『缶廬臨石鼓文全文』、『呉昌碩書画譜』という精品図録を刊行し、呉昌碩の真髄を伝えた。玉蘭図に款書を行草書で題す。「大正乙卯初夏、米舫作。」〔大正乙卯（一九一五）初夏、米舫作。〕

11　菊花図軸

清水董三　縦二四・七×横四三・二
大正・昭和時代　大妻学院

清水董三（一八九三―一九七〇）、号は東翠。栃木の人。中学卒業後上海に渡り、上海の東亜同文書院政治学科を卒業、外務省翻訳官、外務審議官などを歴任。中国在任中呉昌碩などの文人墨客と交わり、中国文人的手法により、書画をものにした。この作は自作の画に唐の徐夤の七言律詩「菊花」の第七・八句を記したもの。詩の大意は「陶淵明が貧しい者であろうか。庭の東の籬にはたくさんの黄金のような菊の花があったのだから。」

12　草書杜牧江南春詩軸

清水董三　縦三三×横五二・三
昭和時代　大石六田氏

唐の杜牧「江南春」詩を行草書で揮毫。「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺、多少楼台煙雨中。東翠書。」〔いたるところで鶯が鳴いて若葉の緑が花の紅に照り映え、水辺の村にも山辺の里にも居酒屋の旗が風になびいている。南朝の頃には四百八十もの寺があったというが、今やどれだけの堂塔がこの霧雨の中にあるのだろうか。東翠書。〕

13　墨竹図軸

前田黙鳳　縦一三七・六×横四二・一
明治・大正時代　松村茂樹氏

前田黙鳳（一八五三―一九一八）、名は圓、播州龍野の人。書家。大正二年（一九一三）六月、主唱した健筆会の第五回展観会に、呉昌碩「天竹老石図」を出展、作家の夏目漱石が観ている。筆者は、呉昌碩の臨石鼓文も出品されており、漱石が『こころ』の表紙装幀（後に『漱石全集』にも使用）の参考にしたと考える。墨竹図に款書を隷書で題す。「雙玉凌雲。黙鳳墨戯。」〔一対の玉のような竹が雲を凌ぐほどに高い。黙鳳墨戯。〕

14　竹石合作図

中村不折・前田黙鳳　縦一三二×横三三・七
明治・大正時代　松村茂樹氏

中村不折（一八六六―一九四三）、名は鉾太郎、信州高遠の人。洋画家。書家。前田黙鳳主唱の健筆会に参加し、呉昌碩に嘱印もしている。不折が石を、黙鳳が竹を画き、黙鳳が唐の方幹「方著作画竹」詩の第五、六句を行草書で題している。「向月本無影、臨風疑有聲。黙鳳画竹幷題方干句。」〔月に照らされても影は見えないが、風を受ければ声が聞こえるかのようだ。黙鳳が竹を画き幷せて方干（幹）の句を題した。〕

15　鹿図軸

池上秀畝　縦三四・三×横二〇・八
大正・昭和時代　松村茂樹氏

池上秀畝（一八七四―一九四四）、名は国三郎、長野伊那高遠の人。日本画家。大正一四年（一九二五）四月二七日、上海の六三園で呉昌碩および王一亭と会見しており、その際、王一亭が「秀畝先生小影」を画き、呉昌碩がこれに賛を題している。この時、秀畝は呉昌碩に花瓶を贈り、呉昌碩はこれを謝して詩を作り、行草書幅として秀畝に贈っている。この「鹿図」は、日本画でありながら、中国文人画の筆致を取り入れている。

16　花卉墨戯図軸

橋本海関　縦一三六・一×横三三
大正・昭和時代　松村茂樹氏

橋本海関（一八五三―一九三五）、名は徳、播磨明石の人。漢学者。明治四四年（一九一一）、上海に呉昌碩を訪ね、筆談を残す。東晋の陶潜「桃花源記」を思いつつ花卉を画き、自作の詩を題す。「長江雨歇水悠々、落日東風春色幽。数片桃花流不去、何時更泛一漁舟。海関。」〔長江に雨は止んで水は悠々と流れ、夕日に東風が吹き春色はほのかである。数片の桃花は流れ去らず、いつ今一度漁舟を浮かべるのであろうか。海関。〕

17　山水図軸

江上瓊山　縦一五一・五×横四六・三
明治四四年（一九一一）　松村茂樹氏

江上瓊山（一八六一―一九二四）、旧姓は鎌田、名は景逸、長崎の人。南画家。山水図に自作の詩と款書を行草書で題す。「遠山不可断、沙水自縈舒。老木柴門裏、一編黄老書。辛亥晴明、雨窓寂然、写之遣興。瓊山人。」〔遠山は断たれることなく、沙水は自ずと緩やかにめぐる。老木の柴門の中で、一編の道家の書を読む。辛亥（一九一一）の晴明節、雨の窓は静かで、これを写して楽しむ。瓊山人。〕

18　蘭石図

阿南竹垞　縦一三三・九×横三二・六
大正五年（一九一六）　松村茂樹氏

阿南竹垞（一八六五―一九二八）、名は衡、豊後竹田の人。南画家。蘭石図に自作の詩と款書を行草書で題す。「一暢王孫草有芳、画成春意不勝長。風窓試把離騒読、恍覚衣襟帯古香。丙辰晩秋写幷題、於酒肆寒碧草堂。竹垞衡。」〔一本王孫草が伸びて芳しく、画は春の趣に長じている。風窓のもと試みに『離騒』を読めば、ほのかに衣襟に古香を帯びたようだ。丙辰（一九一六）晩秋に写し幷せて題した。酒肆寒碧草堂にて。竹垞衡。〕

19　山水図

阿南竹垞　縦八六・六×横二三・八
大正七年（一九一八）　松村茂樹氏

山水図に自作の詩と款書を行草書で題す。「霜樹傍烟舎、遥山淡欲無。漫然写秋意、非必法倪迂。戊午夏日、写於甲南墨芳草堂。竹垞生。」〔霜が降りた樹の傍らに住屋があり、遥かにある山は薄れて無くなりそう。漫然と秋の意を写しているが、必ずしも元の倪瓚の画法によらない。戊午（一九一八）の夏日、甲南の墨芳草堂で写す。竹垞生。〕

20　書画双幅軸

阿南竹垞　縦一三〇・二×三〇・五　縦一三四×横三〇・六
大正一三年（一九二四）　松村茂樹氏

「一結松廬萬壑中、仙境咫尺雲気通。渓声不復弄長舌、唯著清陰洗耳翁。甲子夏写幷題。竹垞。」〔松廬を萬壑中に結べば、仙境は近く雲気に通じる。谷川はもう音をたてず、ただ木陰にいる洗耳翁。甲子（一九二四）夏に写し幷せて題す。竹垞。〕「為愛山中静、日来怡我情。風松霏古翠、天地一濤声。竹垞。」〔山中の静を愛し、日頃気ままに楽しむ。風松は古翠に霏き、天地に波音が響く。竹垞。〕

21　草書軸

滑川澹如　縦一四三×横三八・四
大正・昭和時代　松村茂樹氏

滑川澹如（一八六八―一九三六）、名は達、下総佐原の人。書家。明治三六年（一九〇三）、上海の厳信厚小長蘆館で、共に寓居していた呉昌碩と親交を結んだ。自作の詩を草書で揮毫。「劉寵祠頭夜繫船、銭清江得蟹蝦鮮。青山一帯山陰道、水霧籠沙自若煙。澹如達旧作。」〔劉寵祠の畔には夜も繫がれた船があり、銭清江で取れる蟹蝦は新鮮だ。青山が続く山陰道、水霧が砂地を包み煙のようだ。澹如達の旧作。〕

22　老梅図軸

長尾雨山　縦一三九・五×横三二・二
大正、昭和時代　松村茂樹氏

長尾雨山（一八六四―一九四二）、名は甲、讃岐高松の人。漢学者。上海で呉昌碩と近隣。老梅図に自作の詩を行草書で題す。「千尺寒嶺古渭陲、老梅臨水一枝垂。山中無客問消息、開落従来秪自知。石隠幷題。」〔千尺の寒々とした山峰が古渭という辺境の地にあり、老梅が水に面して一つ枝を垂らしている。山中には老梅のことを聞きに来る人はおらず、花の開落はこれまでただ老梅自身が知っているだけ。石隠（別号）幷題。〕

23　行草書横披

榊原鐵硯　縦三四・五×横一三八・八
大正七年（一九一八）　松村茂樹氏

榊原鐵硯（一八五五―一九三七）、名は浩逸、鐵硯は号。和歌山の人。アメリカで鉄道営業を学び、帰国後は日本の鉄道界に貢献した。晩年は書画家・刀剣家として活躍した。この作は元の趙孟頫（号は松雪）の古詩「題洞陽徐真人万壑松風図」を行草書で揮毫したもの。詩は世俗を離れた心静かな境地を詠んだ作品。跋文を見ると大倉喜七郎（号は聴松）の依頼に応じて書かれたものであることがわかり、「書画文墨趣味ネットワーク」の一端がうかがえる。

24　山水図

柚木玉邨　縦三九・二×横二〇・六
大正二年（一九一三）　松村茂樹氏

柚木玉邨（一八六五―一九四三）、名は方啓、備中玉島の人。実業家。南画家。大正二年および翌年、呉昌碩に計六顆の印を嘱し、大正一〇年、上海の王一亭宅で呉昌碩と合作揮毫をしている。不老（未詳）の為に山水図を画き、款書を行草書で題す。「癸丑夏日、仿王石谷似。不老学兄乞正。玉邨生方啓。」〔癸丑（一九一三）夏日、王石谷（翬）に倣う。不老学兄正されたし。玉邨生方啓。〕

25　楷書邵子清夜吟詩幅

高瀬惺軒　縦一二九・二×横三〇
戦前　大妻学院

高瀬惺軒（一八五六―一九五〇）、名は武次郎。惺軒は号。讃岐山田の人。東京帝国大学講師、京都帝国大学文科大学教授を歴任。著に『王陽明詳伝』、漢詩集『鼓腹集』など。大正二年（一九一三）に二度、上海の呉昌碩を訪ねている。この作は宋の邵雍の五言絶句「清夜吟」を楷書で揮毫したもの。「月到天心処、風来水面時。一般清意味、料得少人知〔月が夜空の中心に来て、風が水面を吹く時。このすがすがしい趣、分かる人は少ないようだ〕。邵子清夜吟。惺軒書」

26　行書幅

佐伯理一郎　縦一三四×横三三・六
昭和二〇年（一九四五）頃　大妻学院

佐伯理一郎（一八六二―一九五三）、号は蘇岳。熊本阿蘇の人。産婦人科医師。京都に佐伯病院、京都産院を設立。後者には京都産婆学校、京都看病婦学校を併設し、看護婦・助産婦教育に尽力した。佐伯が居を構えた京都室町通りには、富岡鉄斎、長尾雨山、江上瓊山らが住んでおり、これら文人と交流があったと思われる。この作は宋の謝枋得の七言律詩「初到建寧賦詩」の第一句を行書で揮毫したもの。「雪中松柏愈青々〔雪中の松柏はますます青々としている〕。八十三叟。蘇岳。」

27　布袋図

宅野田夫　縦一二五・二×横四〇・三
大正・昭和時代　松村茂樹氏

宅野田夫（一八九五―一九五四）、名は清征、福岡の人。洋画家。南画家。呉昌碩と親交があった田口米舫に師事し、大正八年（一九一九）、中国に渡った際、呉昌碩および呉昌碩の弟子でパトロンでもあった王一亭に画を学ぶ。この「布袋図」は、呉昌碩、王一亭の筆致を学びつつ、独自の洗練を加えている。

図版

作品解説と一部掲載順が異なります

28　竹石図

山田寒山　縦一三二・三×横三三・三
明治四一年（一九〇八）頃　松村茂樹氏

山田寒山（一八五六―一九一八）、名は潤子、寒山は号。尾張名古屋の人。篆刻家。詩書画篆刻のみならず、俳諧、陶芸、製菓、経師にまですぐれた。一八九七年一二月、蘇州にいた呉昌碩を訪ね、篆書対聯を与えられている。この作は竹石の画に自作の詩「題自画墨竹」を揮毫したもの。「胸中唯有竹、眼界自無塵。随処寒山路、清風日々新（胸中にはただ竹のみがあり、視界に自ずと俗世は映らない。至る所寒々とした冬の山の道は、清らかな風が吹き日々新たな変化がある）。寒山、山田潤。」

29　与山田聖華房尺牘

富岡鉄斎　縦一八・九×横一五・三他
明治・大正時代　松村茂樹氏

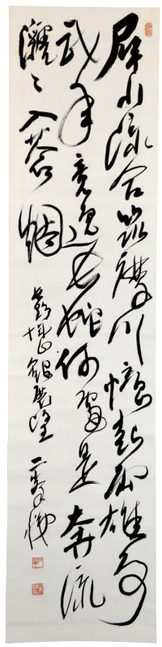
富岡鉄斎（一八三七―一九二四）、名は百錬。京都の人。画家。大正六年（一九一七）、鉄斎は息子の桃華に上海の呉昌碩を訪問させ、印二種の制作を依頼した。この時、長尾雨山は呉昌碩に朱文印制作を依頼し、印を鉄斎に贈った。また大正一二年、鉄斎は呉昌碩に、自身の邸宅に掛ける扁額の揮毫を依頼している。本資料は、鉄斎が聖華房（京都の古書肆・山田茂助）に宛てた書簡等一四点。王士禎『帯経堂詩話』や陸游『放翁詩話』などの取り寄せを依頼しており、鉄斎の中国詩話への関心が窺われる。

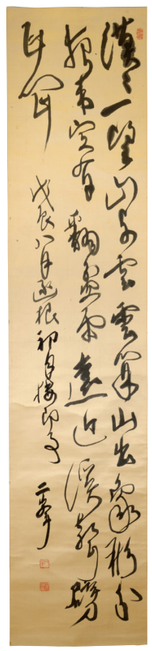
30　魯道人重定詩文潤格

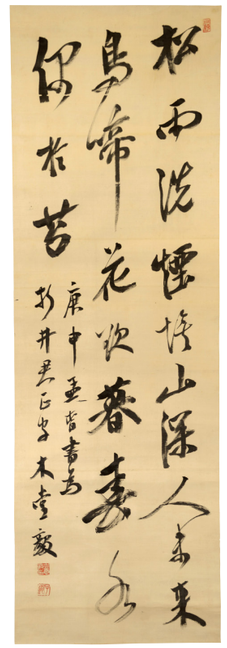
呉昌碩　縦二五・九×横二二・二
一九二〇年　大妻女子大学図書館

呉昌碩が、魯道人（徐子昇）の為に定めた詩文潤格（価格表）。呉昌碩の詩文潤格は稀少。〔魯道人重定詩文潤格。絶句二元。律詩四元。排律は毎韻（二句毎に）五角。古風六元、長篇は倍増。寿序三十六元。駢体は四十八元。楹聯二元、長聯は適宜追加。頌詞・祭文十二元。碑誌・雑文は別に相談。潤筆料は前払い、指定日に取りに来られたし。連絡所、上海の各書画文具店。庚申（一九二〇）三月、呉昌碩七十七歳。〕

5

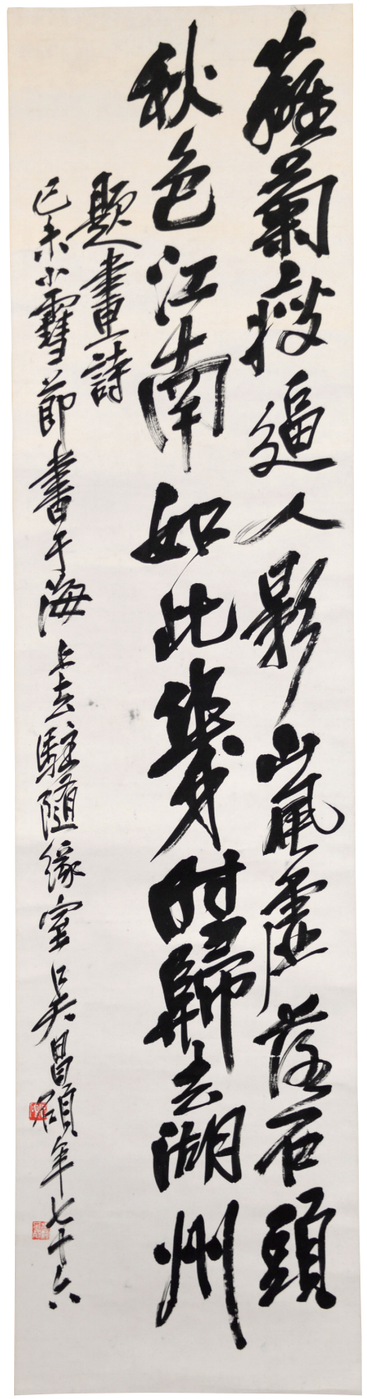

4

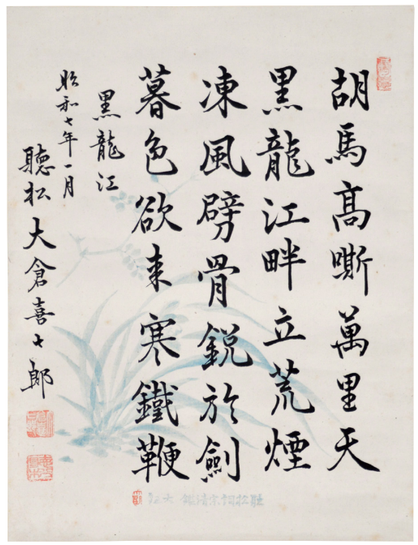

3


2

10

7


1

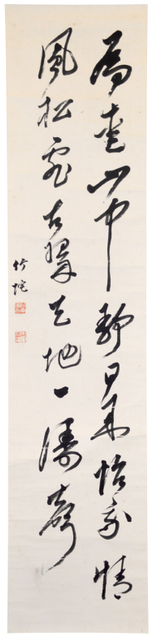

9

20-1

18

16

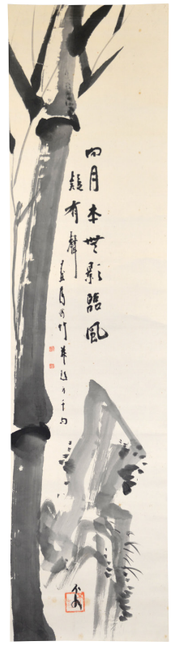
13



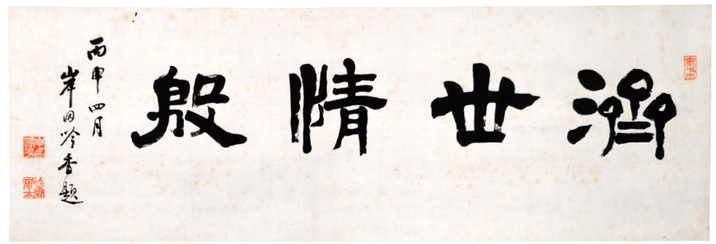
20-2

19

17



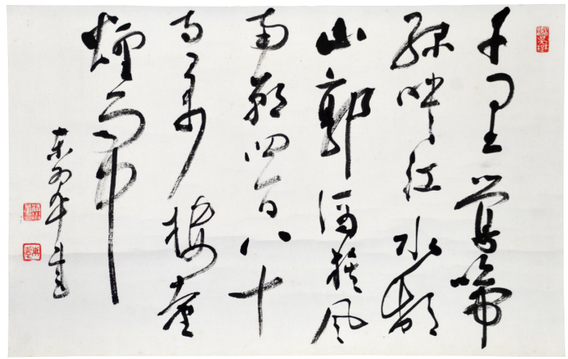
14



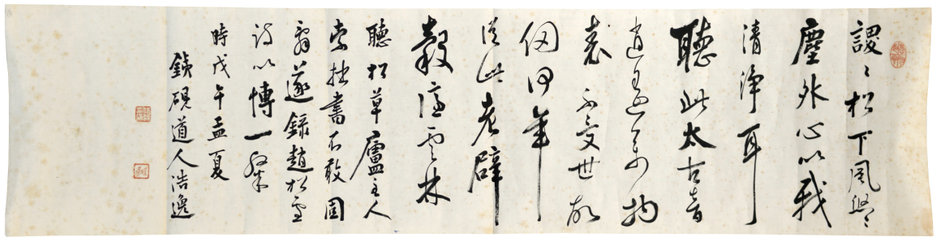
6

11

8

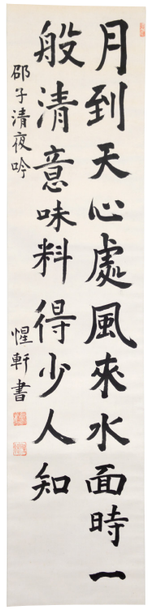


12

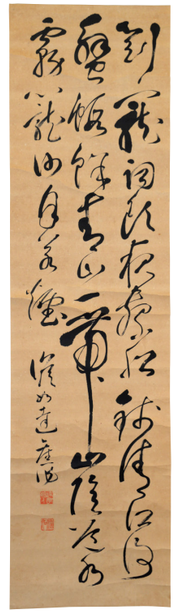


23

27

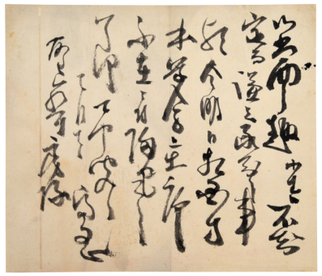


25

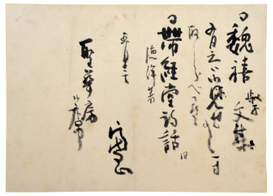


21

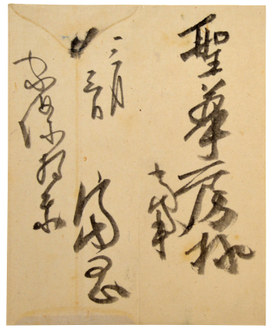
15



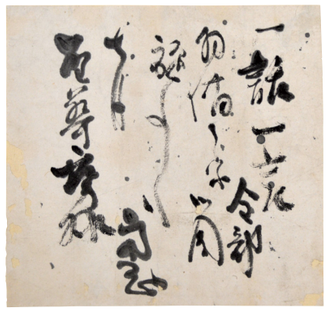
29-5



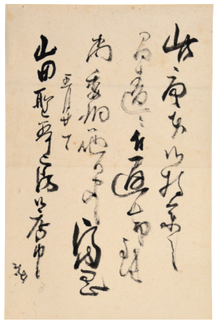
29-3



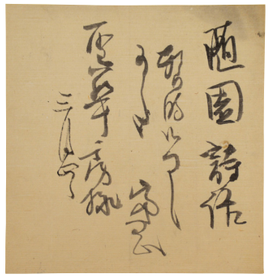
29-1



29-6

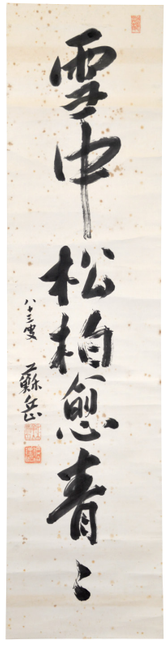


29-4



29-2

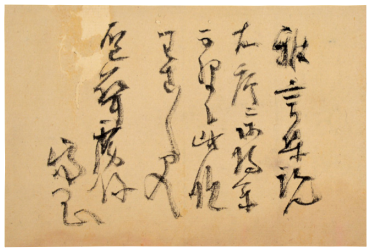
28



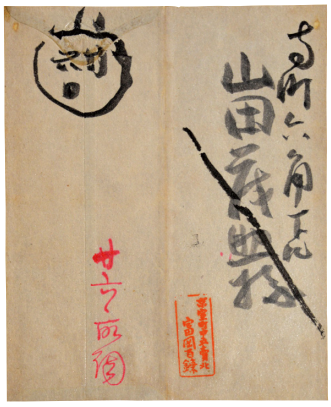
26

22

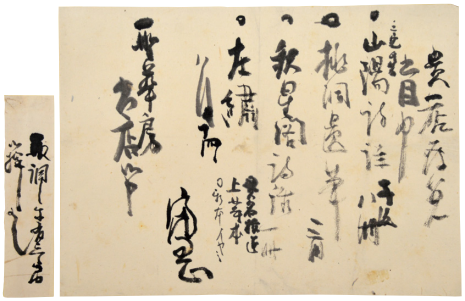
24



29-13

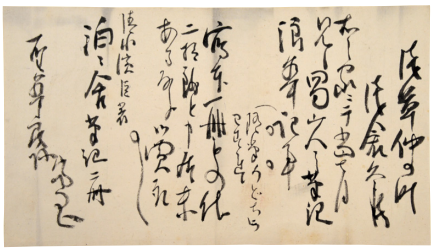


29-10

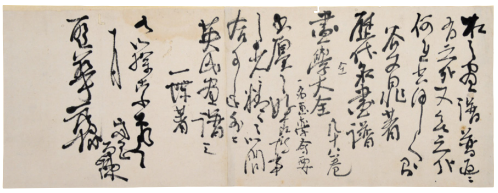


29-7

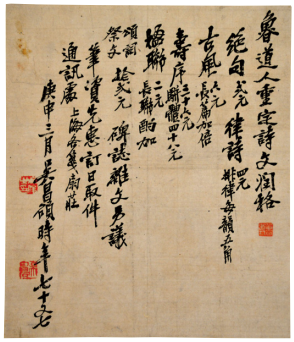
29-14



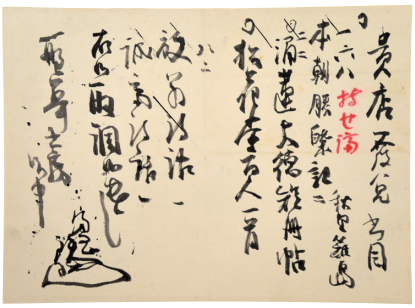
29-11



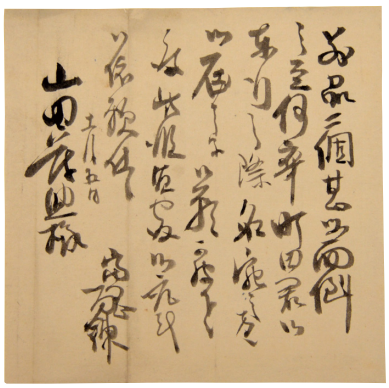
29-8



30



29-12



29-9

大妻女子大学博物館特別展

「呉昌碩と日本人士　―中国最後の文人と交流した書画文墨趣味ネットワークの人々―」

図録制作　株式会社ケンズ

発行日　二〇二一年三月一六日

編集・発行　大妻女子大学博物館（東京都千代田区三番町一二　図書館棟地下一階）